



会津医療センターから

こんにちは！



【9】 小腸・大腸・肛門科学講座
教授 冨樫 一智

『郷里に最高の医療提供』

こな雪、つぶ雪、わた雪、ざらめ雪、みず雪、かた雪、春待つ冰雪、津軽には7つの雪が降るとか…。私の好きな演歌の一節である。私の郷里、会津にも7つの雪が降ることを子どもの頃から実感してきた。とにかく、会津の冬は雪が辛い。中通りは快晴。しかし、トンネルを抜けた会津は雪国。この理不尽さがために、いったんは雪の少ない北関東を「ついのすみか」とした。しかし、東日本大震災の前年、会津で消化器病診療の一翼を担うこととなった。自分を育み、そして自分の両親が待つ「郷里会津」に少しでもお役に立ちたいとの思いがあったからである。

会津医療センター小腸・大腸・肛門科では、首都圏の大病院と同等の医療を提供したい。他の医療機関では解決できない大腸疾患患者を受け入れる「最終医療機関」としての役割を果たしたい。高度の医療を提供するだけでなく、患者さま一人一人に応じた医療の個別化、すなわち、同じ病気であっても患者様の状態・生活環境に応じた「きめ細かい医療」を提供したい。このような思いのもとに、全国から大腸疾患の専門医師たちが集まった。

この中には、大腸医療で知られる昭和大学北部病院出身の腹腔鏡外科医・遠藤俊吾教授、大腸CT検査の第一人者・歌野健一准教授、遺伝性大腸癌の専門家・隈元謙介准教授がいる。それを支える五十畑則之講師、愛澤正人医師、高柳大輔医師、根本大樹医師もいる。これら一人一人の力を結集して、今や「最高の医療」を実現しているとの自負はある。

昨今、話題の「腹腔鏡外科手術」、「内視鏡的粘膜下層はく離術（ESD）」は、首都圏の有名病院と同等の医療、いや、きめ細かさにおいては、それ以上と言っても過言ではないだろう。食生活の欧米化に伴い、会津でも潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患は増加の一途をたどっている。

今、この分野で医療革命が進行中である。つい10年前は外科手術を要した場合でも、内科的治療により病状が安定するようになった。小腸・大腸・肛門科では、若い患者さまに多い炎症性腸疾患にも取り組んでいる。